みなと・新橋 今・むかし新聞

第３号
平成27年3月

「港区平和青年団との交流会」

港区は毎年、平和青年団として戦争や核兵器の悲惨さ、平和の大切さについて自ら学び地域に伝える高校生世代を募集しています。平成二十六年度は七名の高校生が選ばれました。

長崎派遣研修に向けての事前研修として、平成二十六年六月十四日に、初めて港区平和青年団と語り部との交流会が、港区役所の会議室で行なわれ、語り部のみなさんが作成した「みよちゃんの集団疎開」という紙芝居を見た後、グループに分かれて、語り部の方が自らの戦争体験を語りました。

平和青年団のみなさんは、教科書にも載っていない、授業でも学ばない、実際の戦争体験者の話を聞いて、驚きを隠せないようでした。

今回の交流会を通して、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継いでいくことの大切さを、改めて感じた一日でした。

高校生との交流後、語り部のメンバーの一人が寄稿してくださいました。

「今と昔と」

神代　忠男

私は現在九十二歳。いわゆる学徒出陣で太平洋戦争にも参加しましたが、幸運にも生き永らえて元気に何とか過ごしております。

私の若い時代と現在、特に戦争を境として世の中は大きく変わったと思います。

大きな変革、即ちテレビができたとか、パチンコ、パソコン、携帯電話等が現れたというようなことは別として、私が身近に感じた昔と今の変わったところを二、三記してみることにいたします。

一、清貧と言う言葉

昔は清貧を貴いとする風潮がありました。小説家はその貧しさを私小説に書き、落語家はその貧しさをキャッチフレーズにして人を笑わせ、政治家さえその清貧さを種として人を笑わせ、政治家さえその清貧そして急に財産を得た人を成金と称して軽蔑さえしていました。

小学校の友で、とても貧しそうな子がいて弁当のおかずもシケいたので、私は自分のおかずを分けてあげたりしていました。

ところが、卒業してから彼の家に遊びに行った友が大変ビックリ！巨大な家に住み、当時まだ珍しい自家用車が二台もありました。

今思えば彼はその金持ち状態がとても辱しかったので極力隠していた訳です。

ところが今は、自分が金持ちであることが自慢できる世の中であるらしいですね。

二、喫茶店にて

我々が学生時代、喫茶店によく数人の友と行きました。そして大いに人生、思想、女性等のことを語り合ったものでした。

しかし最近、喫茶店に行くと一人客が大部分で、パソコンをやったり本を読んだりで、余り友達同士でわいわいやっていませんね。

今の若者は友が少ないのか、或いは孤独を愛しているのか、何となく寂しい風景です。

三、女中さんのこと

「女中さん」という言葉は死語になりましたが、今でいう住込みお手伝いさんのことです。

昔東京では、サラリーマンの課長級の家にも女中さんがおりました。

そしてその女中さんの多くは、その家の先祖の故郷から「行儀見習」として預かったもので、月給等無くせいぜい小遣いしか与えないで家事の手助けをさせていました。

しかし、その女中さんがいい年齢になると嫁入り先を見つけてやり、嫁入り仕度もしてやって嫁に行かせたものです。

今は重役さんの家でも住込みのお手伝いがいる家は少ないのではありませんか。

現代の人件費の高騰もあり、またその頃の様な情による使用人制度がなくなった為でもある様です。また、東京と地方の縁が昔の様に密ではなくなった為かも知れませんね。

以上、身近なことを二、三、取り上げてみましたが、まだまだ考えれば昔と今との違いは色々あり、これ等の世相の違いを見て、今後の日本の有り方を考えてみるのも一興ではありませんか。

また、女性の職場進出が増えた為かも。

注（女中という言葉は人格を損ねる用語ではありますが、原文を尊重しそのまま記載しています）

「港区学校支援地域本部『出前授業』について」

今年度より、港区学校支援地域本部事業の学校支援ボランティアとして、「出前授業」を行なうことになりました。

早速、青南小学校から三年生を対象に依頼があり、二月六日「昔の道具の使い方を学びましょう！」の講座で、芝小学校の郷土資料室を見学。

二月二十七日は「昔の生活を学びましょう！」の講座で、七輪で火起こし体験をしました。

「出前授業」に参加したメンバーから、次の感想をいただきました。

「芝小学校 郷土資料室について」

宇和島　常子

青南小学校三年生の皆さんが、二グループに分かれて芝小学校の郷土資料室を見学。

昔の生活道具、遊具、通貨等々見るにつけ、あちこちで歓声があがりました。

今日ではすべて便利に電化、コンピュータ化された現代に育った子供達は目を丸くし、恐る恐る手を触れ考え込んでしまう子供たちもいました。

中でも木製の大きな脱穀機の前では、お百姓さんが五月に田植えをして、十月に刈り取り、干した籾を脱穀機にかけ、白米になるまでの工程を説明すると、目を光らせて聞き入っていました。

すると取っ手をつかんで廻し始めたので、籾～玄米～白米とこのようにして皆さんが毎日いただいているご飯になるの

よ・・・と話すと真剣に聞き入り考え込んでしまう子、感激する子、各々に思いを巡らせていたのでしょう。

また、昔の井戸、つるべによる水のくみ上げや(現在は水道ひとひねり)、事務機器のコーナーではタイプライター、謄写版によって文章が打たれ、印刷されていたこと。

現在はパソコン・ワープロなど短時間で仕上がることにも、その変遷が子供達なりに解かってくれたように思います。

そんな中で、立派な大きな屏風を見つけ「これ風神と雷神でしょう。ぼく知ってるよ!」とはしゃぐ子供達が何人かいて、三年生ですばらしいと思いました。

因みに、風神とは風をつかさどる神、雷神とは雷鳴、雷光をつかさどる神のこと。

このように低学年のうちから郷土資料室を訪れ、今昔の生活の歴史の移り変わりを知り、今日の発展があることを理解し、意識を広げていってほしいと強く感じました。

「青南小学校三年生と七輪体験をして」

中嶋　房子

二月二十七日、昨日の冷たい雨がうそのような、明るく澄んだ春めいた朝。

八時十五分におひな様の飾られたロビーに集合、暖かい会議室で校長先生から丁寧なご挨拶をいただきました。

八時四十分より校舎の裏庭で七輪体験が始まり、一班、四~五名にお母さん、そこに私達が加わって七班に分かれました。

先生のご指導で生徒さん達は手際よく準備され、新聞紙を細かく裂き、古い割り箸を折って火起こし開始。マッチの使えない人、擦りたい人で大変です。

七輪の空気口、うちわの使い方、消炭、炭の入れ方などを説明、マッチの使い方に注意して、火がつき炭が赤くなって火起こし成功。

網を用意してお餅を乗せ、遠火で上手に焼く人、焦がす人、きつね色になり〝プーット〟ふくらむと大声で喜び「どのお餅が焼けたかな」楽しいひとときです。用意されたのりを巻いて、磯辺焼きにおいしいと舌鼓をうちました。

後片付けで火消壺に順番に炭火を入れて消炭にします。注意深く炭火を挟んでいると、七輪の火皿の下にたくさん灰が溜まっていることに気がつきました。

戦争中は、その灰を大切に集めて〝だらい〟に入れ水を張り、一日おいて上澄みの水で洗濯した話をしました。

戦争中は石鹸がなく母が苦労していた話に、生徒さんも若いお母さんも興味深く、何もない時代を想像してくださいました。

電燈には黒いカバー、窓ガラスには紙が貼られていた戦争時代。

小学校一年生の時、防空演習で地下室に入る練習をした日々が走馬灯のように過ぎ、セピア色になった疎開先の田舎の生活が思い出されます。

一日でした。

私が三年生の八月十五日、疎開先の茨城の田舎で、ラジオのある私の家に近所の人が集まり、玉音放送を聞いたあの空虚感を忘れることはできません。

「七輪さん　ありがとう」

髙橋　邦子

昭和二十年八月終戦を迎え、小学一年だった私は疎開先の栃木から、五月二十五日の空襲で焼野原となった芝浦へ。

当時はいつまでも疎開先にいると戦前から住んでいた土地に、知らぬ他人がバラックを建てて住んでいるのです。

父は出征、母は遊船業をしていた自分の土地を守ってバラックを建て、四人の子供を連れて芝浦へ戻りました。今考えると大変だったと思います。

電気はまもなく復旧しましたが、よく停電をしてローソクのお世話になりました。

ガスのない生活、煮炊きは七輪の火起こしから始まります。

まず新聞紙を丸めてマッチで火を付け、用意しておいた小枝を乗せ火力が付いたら炭を乗せ、七輪の下にある小窓からうちわでパタパタ風を送り、炭に赤く火が移ったら家の中に運んで、火鉢に炭火を移します。

七輪ではお湯を沸かしたり、煮物をしたり、冬は冷たい手をかざして暖房の役も。

火起こしは外の作業なので、雨の日は大変です。軒下のないバラックで、母は下の妹を背負い、傘をさして目に染みる煙をさけ、うちわでパタパタしていた姿が思い出されます。

食事も終わり寝る前に、七輪の炭火が残っていると消壺の中に入れ、消炭にして翌日も使います。

消炭は、火力も柔らかく、トースターに変わり、食パンを焼いてマーガリンを塗ると、バターはなくても大変美味でした。

また、東京湾で釣ったハゼの腸を取ってくしに刺し、七輪で程良く焼き干して、お正月は甘露煮を作りました。

当時は、海苔の養殖も盛んで、道路の片脇に海苔を干す、すだれが並んでいました。香り豊かな浅草海苔。七輪で焼いたお餅に醤油を付け、海苔を巻き一番の御馳走でした。

当時の食糧難を豊かに支え、家族団らんの中心となって七輪を囲んで食べたささやかな食事、家族の笑顔、大切な母を思い出す七輪、私を育ててくれた七輪、七輪さんありがとう。

戦後昭和20年代　バラックで食卓を囲んで

ばるーんの『語り部』ってなあに?

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の学習会を行っています。

平成十五年度からは、これまでの学習成果の発表の場、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

地域の歴史や暮らしまた戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

この「みなと・新橋　今・むかし新聞」もその一環として発行しています。

ぜひ、興味のある方は、ばるーんまでご連絡ください。

発行・問合せ
住所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋三-十六-三
電話　〇三-三四三一-一六〇六
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（ばるーん）
協力・編集　新橋青年しんこう会